

国際文化学の入門テキストを読む

Review of a few Texts for Beginners of Intercultural Studies

倉 真一・四方由美・森部陽一郎・楠田剛士・梅津顕一郎

ここ数年の間に国際文化学の入門テキストが立て続けに出版されている。本書評は、本学（宮崎公立大学）と同様に国際文化学系の学部・学科を持つ国内3大学の国際文化学の入門テキストを対象としている。国際文化学科という枠組のなかでリベラル・アーツを標榜している本学にとって、これら他大学の入門テキストとその編さんのプロセスから学ぶものは極めて大きい。特にテキストの編さん自体が学内外との多様な対話の可能性を拓くことは、本学の学びのアイデンティティの再確立にとって重要な契機になりうるだろう。

キーワード：国際文化学、リベラル・アーツ、新入生向け入門テキスト、対話

目次

- I 国際文化学の入門テキストを読むということ
- II 3大学における入門テキストを読む
 - 1. 文教大学国際学部①
 - 2. 文教大学国際学部②
 - 3. 静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科
 - 4. 山口県立大学国際文化学部
- III 国際文化学の入門テキストを編むということ

I 国際文化学の入門テキストを読むということ

「国際文化学って何ですか?」、「国際文化学科で何を学ぶのですか?」、「国際文化学科でリベラル・アーツ?英語以外にイメージ湧かないのですが...」、「国際文化学って何の役に立つのですか?」等々。

これらは受験生や保護者、高校の進路指導担当者から大学や教員へ、あるいは企業の採用担当者から学生へ、様々な場面で数多く発せられてきた問いである。そしてこの問いに答えようとする

ことには、たいていの場合、なにがしかの困難がともなっている。問いへの答えにおもわず窮したり、答えてはみたものの質問した相手の顔はとも納得しているにはみえず、自問自答を繰り返すも「これだ」という答えには至らず。一言でいえば国際文化学を「公言」(profession)できない困難、換言すれば大学や教員、学生にとって、「国際文化学」という研究や学びが本当の意味で「アイデンティティ」(identity)になりえていないがゆえの困難である。

これはひとり本学(宮崎公立大学)だけが抱える困難ではない。例えば、山口県立大学国際文化学部が連続講演会の記録として『国際文化学の創造』という本をまとめた経緯は、次のようなものだったという。少々長いが引用してみたい。山口県立大学を宮崎公立大学に置き換えても、そのまま読めてしまう文章である。

一九九〇年代日本において「国際学部」、「国際関係学部」など「国際」という名称を冠せた学部が次々と新設された。「国際文化学部」もその一つである。本学での同名の学部開設は一九九四年であるが、その学部で教鞭をとることになった私たちがまず直面したのが、この新しい分野のなかで自分の専門をいかに再構築するかということだった。そのためには国際文化学研究とは何なのか、どのようにすれば「学」として成り立つのか、という課題に答えるてがかりを探り出し、さらに、この研究分野が持つ可能性についても確かな見通しを持ちたいと思った。そのような目的で学部に「国際文化学部研究会」を発足させ、講演会活動は、研究会活動の一環として行われた。国際文化研究の方向性を考えるうえで、それぞれの講演は内容豊かで知的刺激に富み、私たちに新たな問題発見をもたらした。これを講演だけに終わらせるのはもったいないという気持ちから、講演テープを起こして演習のテキストとして使ってきた経緯がある [三宅・片山・安野・山口県立大学国際文化学部,2002:3]

評者らも宮崎公立大学でリベラル・アーツを標榜する人文学部国際文化学科の一教員として、それぞれの専門をいかに再構築しながら教育や研究に活かしていくか、という課題に直面してきた(そして今も直面している)。国際文化学科という枠組のなかでリベラル・アーツを実践することの意味や価値、可能性について、より確かな見通しを持ちたいと考える。

こうした問題意識をゆるやかに共有しながら、評者らは宮崎公立大学の学長裁量事業として、「MMU型リベラルアーツ入門授業とテキストに関する自主研究」プロジェクトを立ち上げた。そのプロジェクトで最初に取り組むことにしたのが、他大学の国際文化学系の学部や学科の教員たちが、学生(特に新入生)向けに編さんした「国際文化学」の入門テキストを読む読者会だった。

本書評はその共同プロジェクトの、ささやかではあるが最初の成果である。本書評を書くにあたっては、読書会で発表を担当したメンバーにそのまま各大学の入門テキストの書評を担当してもらった。読書会で取り上げた入門テキストは、文教大学国際学部が2冊、静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科が1冊、山口県立大学国際文化学部が2冊(うち1冊は副読本)の計5

冊である。

書評にあたっては、第一に入門テキストを編さんするに至った経緯や動機、目的やねらいをふまえた上で、第二にそうした経緯や動機、目的やねらいが入門テキストの構成や内容にどのように反映され、当該テキストの特徴や長所をもたらしているのか、第三に本学（宮崎公立大学）とその教員・学生にとって、他大学の入門テキストから得られる知見やヒントは何か、仮に本学で入門テキストを編さんすることになったならば共有できる視点や問題意識とは何か、という批評のポイントを共有しながら、その他は各評者の専門や問題関心を活かして、自由に書評してもらうことにした。もし本書評に一般的な書評と若干趣を異にする印象があるとすれば、それは書評にあたっての上記の方針に由来するといつてよい。

II 3大学における国際文化学の入門テキストを読む

1 文教大学国際学部①：

奥野孝晴（編著）『[三訂版]グローバリゼーション・スタディーズ：国際学の視座』創成社 2012年。

『[三訂版]グローバリゼーション・スタディーズ —国際学の視座—』は、国際学の入門案内書として文教大学国際学部の教授陣らによって執筆されたものである。全17章の二部構成からなる本書は、グローバリゼーションというキーワードを通して国際学の射程を読者に示し、その視座から歴史過程および現代社会の課題を明快に解説している。

第I部「グローバリゼーションへの史的アプローチ」は、国際学とは何かを考えるとともに、歴史を振り返りながらグローバリゼーションと呼ばれる事象の見方、取り組みを扱っている。各章がグローバルヒストリーの語りとなっており、取り上げられる各事象について史的かつ分野横断的に編まれている。「近代市民社会の登場とその現代的意義」（第7章）のような、グローバリゼーションを考えるには必須である市民社会の成り立ちから現代までを体系的に整理する章だけでなく、「新大陸の『発見』と『征服』」（第2章）、「近代日本と植民地主義」（第4章）、「近代と世界経済システム」（第5章）など、グローバル化の進展が内包してきた侵略や植民地支配といった負の側面にも正面から言及している。

第II部「グローバリゼーションの『現場』とその問題点」は、食、音楽、ツーリズム（第11章、第12章、第10章）など現在の私たちが関わりを持つグローバリゼーションのさまざまな側面に着目し、現代社会の特徴と問題点を指摘している。異文化理解、多国籍・多文化、グローカリゼーション、国際協力（第9章、第13章、第15章、第16章）などの国際学のキー概念はもちろん、地球市民（第17章）といった「理念」を用いてコミュニティデザインを考えるワークショップが提示されている。『「核」と市民社会』（第14章）では原発問題を取り上げるなど、3.11以降の

日本社会にとって重要な課題を意欲的に論じている。

また、序章において「楽観論と悲観論を対等に扱うことを目指す」と述べられているように、本書は全体を通してグローバリゼーションに対する評価をバランスよく併記している。まさに、二元論が持つ暴力性に気付き、二者択一的発想から自由になりたいという執筆陣の意図に共感する。近年のグローバリゼーションが持つスピード至上主義的価値観や目的合理的価値観の普及は、短絡的に善か悪かを決めたり、役に立つことばかり求めたがる傾向を強めていることは否めないからである。

他方、本書はテキストとして活用するための具体的工夫がなされている。例えば、「ことば」をテーマとした「もう一つの1492年：ことばが単なる『道具』になった年」(第3章)には、「英語帝国主義」と題した【トピックス】が配してあるなど、読み手が内容を発展させることができるほか、関連する事象は章をまたいで参照先が記載され、理解を助ける。また、各章の冒頭に【キーワード】として、理解に不可欠なワードをリストアップしている。章末には、【ディスカッションのために】として、意見交換のためのアジェンダ(課題)が用意されているほか、【リーディング】では基本文献の紹介を行っている。

本書は、「国際文化学科って何を学ぶの?」という新入生の疑問に答えてくれる1冊といえる。高校までの科目ごとの学習を行ってきた彼らにとって、学際的視野から各事象をとらえなおす絶好の機会となろう。こうした知的な営みが、グローバリゼーション・スタディーズの第一歩、国際文化学のスタートとなるのは望ましい。しかしながら、(本学では)初年度に読みこなすにはやや難度が高い。あるいは、この完成された論考を読んで満足してしまい、自分で調べてみる作業につながらないおそれもある。さまざまな事象の点と点を自ら繋いで知見を得てもらいたいという観点からすれば、リードする教員の力量も試されることとなろう。

(評者：四方由美)

2 文教大学国際学部②：

奥野孝晴・椎野信雄(編)『私たちの国際学の「学び」:大切なのは「正しい答え」ではない』

新評論 2015年。

本書は文教大学において、「国際学」を学ぶ新入生のための入門書である。国家と国家の関係だけを問題としてきた従来の国際学という学問を問い直すことを目的としている。対象読者である新入生に対し、身近な問題から「国際化」とは何かを理解し、行動のための実践知を求める「学び」を行うことの重要性を説いている。この参加型・実践型の学問こそが、本書のタイトルにもなっている「私たちの国際学の『学び』」であるとしている。

本書の内容について。はじめには、「若い読者の方々へ」と題し、身近なところから「国際化」とは何かを理解し、行動するための実践知を求める「学び」を行うことの重要性を説いている。第1章旅する世界では、「旅」をモチーフに「異なるもの」への理解について。第2章「第三世

国際文化学の入門テキストを読む（倉真一・四方由美・森部陽一郎・楠田剛士・梅津顕一郎）

界の彼（女）ら」と「私」と「私たち」では、「豊かな国」と「貧しい国」からグローバル化についての様々な問題について「私たち」の問題として理解することについて。第3章環境問題とグローバルゼーションでは、共感する「私」を出発点として、どうすれば環境協力行動へ繋げさせられるかについて。第4章国際観光の光と影では、「産業」としての国際観光の実情について。第5章企業の多国籍化と地球市民社会では、企業の多国籍化の現状とその影響、さらに「よりよき地球市民社会」構築のためについて。第6章では、グローカリゼーションを考えるでは、グローバルな課題や問題を踏まえながらローカルな課題や問題に取り組むことについて。第7章では、多文化社会に生きる「私」では、自分と向き合うことから自分の周りにおける異文化を理解できることについて。第8章つながるためのコミュニケーションでは、言葉を通じて異なる世界観を知ることでも私たちの国際学の「学び」としてとらえることについて。第9章「豊かさ」について考えることでは、「中枢・周辺関係」の構図から共に作り上げる「真に豊かな私たちの世界」について。第10章パスポートから見た国際社会では、「パスポート」から、これからの国際社会のあり方について書かれている。

以上のように、本書は10章構成となっており、14名の文教大学国際学部所属の教員により書かれている。本書の目的は「正しいか（正解か）、正しくないか（不正解か）」の知識を問題とするのではなく、その回答を導き出す基となるABC、つまり、すでに当たり前のこととして大前提においてしまっている考え方それ自体を問い直し、そのプロセスを「人々と共に生きるための学び」のプロセスに転化していくことの大切さを共有することにある。

本書が宮崎公立大学（以下本学）の学生、特に新入生を対象としたものとしては、「読み物」として、知的好奇心をかき立てる内容を十分に包含しているが、本学における例えば新入生対象の基礎演習のテキストとしては、その「読み物」としての性格が、利用しにくい構成となってしまうと思われる。しかし、本書が問いかける、「常識を鵜呑みにせず、自分の頭で考える」姿勢は、本学の学生に必要なものであると言える。

（評者：森部陽一郎）

3 静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科：

静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科（編）『国際文化学への第一歩』すずさわ書店
2013年.

静岡文化芸術大学は2000年に開学し、2010年4月に学校法人から静岡県設立の公立大学法人へ移行した。現在、文化政策学部（国際文化学科、文化政策学科、芸術文化学科）と、デザイン学部（デザイン学科）と、それぞれの大学院がある。本書はその中の一学科の所属教員（2012年度現在）によるもので、国際文化学を学び始める大学一年生向けのテキストとして編まれた。

「まえがき」では、「国際文化学」とは「いまだ形成途上の新しい学問」で、独自の理論と方法は模索中だと述べられる。そこで「国際文化学とは何か」という問いに対する教員の一致した答

えは「正直なところ」「まだ準備できていない」が、答えるための「第一歩」が本書なのだという。巻末にある執筆者紹介の研究テーマや担当授業科目を見ると、本学の言語・文化専攻と国際政治経済専攻に重なるところが多いが、日本・英米・フランス・イタリアの文学、日本・ベトナム・アゼルバイジャン・フランスの歴史、日本・英米・韓国・ブラジルの文化など、各国の文化論・文化史の層が厚いことがわかる。この学科の教員に、それぞれの授業・研究分野への導入となるエッセイの執筆が呼びかけられたのだから、寄せられた18章のエッセイと4本の短いコラムが扱う国・文化・方法も様々なものになる。これが本書の特徴の一つである。国際文化学の多彩さを示すものだが、そのまま原稿が並べられていけば「ばらばらに書いて集めたもの」(p434)になっただろう。

そこで国際文化学の学問構築のために多様性とともにより統一性が求められる。本書では、国際文化学という「新しい学問」に三つの性質を見ている。一つ目は、「間文化性」(インターカルチュラリティ)という、文化と文化の相互作用が生み出すダイナミズムや事象を研究対象とすること。二つ目は、人文社会科学の理論と方法を組み合わせて研究する「学際性」があること。三つ目は、地域性・日常性と国際性が結びついた「実践性」のある教育・研究を行うことである。この三つの性質を本書では三部構成の柱とする。第一部が「インターカルチュラリティ」の理論・概念・研究動向の紹介、第二部が各学問分野(ディシプリン)と国際文化学との関わり・広がり、第三部が地域性・国際性を帯びた様々な研究・教育の実践例である。エッセイ・コラムは各部数章に分けられ、それらを挟む形で各部のはじめとおわりに「国際文化学ノート」(11本)が置かれる。このノートは本書のエッセイ・コラムが「ばらばらに」ならないように理論的な枠付けを行うもので、おそらく本書でもっとも工夫あるいは苦慮された部分であると思われる。それも一つの特徴であり、国際文化学を学問的に構築しようとする努力の「第一歩」が看取される。

各部各章の内容については字数の関係上、細かく紹介することはできないが、とりわけ第三部は静岡県浜松市＝「日本でもっとも多くブラジル人が暮らすまち」(p358)にある大学としての特徴がもっともよく表れており、読み応えがある。個々の文章には、参考文献・読書案内があり、エッセイ・コラムには keywords が付く。ただしこの欄が十分に機能しているとは言い難い。工夫次第ではエッセイ・コラム・ノート同士を結びつけ、関連するテーマや方法に導いていくことができたかもしれない。だがそれも瑣末な指摘だと思えるほど、「まえがき」「おわりに」「編集後記」では端々に編集過程における苦勞が語られる。詳しくは省略するが、国際文化学科では何をどのように教育し研究するかということの本気で考えたときにこの苦勞は避けられず、あるいはそれなしの喜びもないのかもしれないと、本書を読み考えさせられた。編集過程で教員同士の相互理解を深めたのであれば、次なるテキストへの「第一歩」も見えてきただろう。まだ独自のテキストがない本学にとって、学科の特色・英知を伝える本として構想され、先行するテキストや研究の成果を取り込み、地域貢献や実践性に関するエッセイも含んだ本書は、大いに学ぶべき先行事例である。

(評者：楠田剛士)

国際文化学の入門テキストを読む（倉真一・四方由美・森部陽一郎・楠田剛士・梅津顕一郎）

4 山口県立大学国際文化学部

山口県立大学国際文化学部（編）『星座としての国際文化学：みつけて、つなぐ、学びのスタイル』青山社 2013年。

山口県立大学国際文化学部（編）『知の空へはばたこう：国際文化学をまなぶあなたへ』東洋館書出版（西部本社） 2014年。

(1) 山口県立大学「国際文化学部」の構成と、二つのテキスト

山口県立大学は現在3学部（国際文化、社会福祉、看護栄養）5学科（国際文化、文化創造、社会福祉、看護、栄養）構成の総合大学として運営されている。その前身は1941年開設の山口県立女子専門学校である。1950年に県立女子短期大学に改組し、1975年には4年生化、さらに1996年には男女共学化し、現行の形態となった。

同学に「国際文化学部」が設置されたのは1994年、共学化の2年前であり（文学部の改組転換により設置）、1993年開学の本学とほぼ同じ歴史を持っている。大学の特徴として「教育重視」をうたっており、公式ホームページには「国際的視点を持ち、地域の諸課題に対応できる教養及び技能を備え、地域の国際化、個性豊かな地域文化の振興と創造に資する人材を育成します」との記載もある。ある意味、本学とよく似たコンセプトの大学であるともいえる。ただし、定員数が本学のほぼ半分規模であるという点では、「少人数教育」をより徹底した学部であるとみてよいであろう。また、「人文学部」の下に「国際文化学科」を置く本学とは異なり、学部名に「国際文化学」を拝しており、さらに「国際文化」「文化創造」の2学科を配置していることから、より文化学教育を徹底していることが伺える。

その表れが、現在山口県立大学が独自に発行し、使用している二冊のテキストである。

『星座としての国際文化学～みつけて、つなぐ、学びのスタイル～』（初版2013年3月31日）は、「国際文化学を学ぶこと」について、「さがす」「みつける」「つたえる」「つなぐ」の5要素から、緩やかな体系的議論を展開している。

一方、翌年発行された『知の空を羽ばたこう』（初版2014年3月25日発行）は、入学から卒業までの大学での学びについて、その意義から実践的な案内まで広く網羅している。語学教育や演習科目、さらには施設利用などについて、1話2ページ以内で完結するエッセイ集としてまとめられている。「山口県立大国際文化学部で学ぶこと」自体がテーマとなっており、キャンパスガイド的な役割を果たしていると考えられる。

以下では、正規のテキストである『星座としての国際文化学』を読み解きながら、同大学における「国際文化学」教育について考えてみたい。

(2) 『星座としての国際文化学』を通して見えてくる山口県立大版「国際文化学教育」

①概要：「背骨」を持った体系的教育

本章冒頭に述べた通り、同大学においては本学以上に「文化学」教育に力点を置いた学科構成を取っていると考えられるが、それは実際の教育内容にどう反映されているだろうか。

本書を見る限り、それは学問レベルの議論と教育レベルの議論をつなぐ柱として、社会生活における〈境界〉を発見し、「差異性」と「同質性」を見極め、「越境」する（繋ぐ）という明確なコンセプトを提示して、国際文化学の定式化を試みるという点に現れている。

このコンセプトは、学問レベルでは、「異文化とは何か」という定義づけにはじまり、異文化間の「差異」と「同一性」に関するとらえ方（境界線をどう見つけ、違いと同じをどう整理するか）といった概念規定の問題、異文化を紡ぐための実践的課題としての知性と寛容性や、繋ぐための具体的技術の在り方、さらには「異文化」の単位としての地域、あるいは同じ生活圏内に存在する異質なものの、さらにはつなぎ方としての地域間、地域内での異セクション間、あるいは国境を越えた地域間のローカルな国際化といったテーマが論じられる中で成就している。

他方、教育レベルにおいては、上記のような、学問レベルで求められるグローバルでしなやかな「異文化コーディネート力」の育成という視点から、様々な知的技術、教養、語学力の意義が明確化されている。

②時代との明確な距離感を持った実践的教育としての「国際文化学」

このように、学問的営為と教育とを、明確なコンセプトの下で結びながら、「文化学」の社会的・アカデミズム的役割を意識して構成している点は、高く評価されるべきであろう。とりわけ国境を越えた地域間のローカルな国際化という提言については、後期近代と呼ばれる現代にあって、従来の中央集権的発想に基づく国際化がある種の限界を見せる中、それを凌駕する新たなモデルの提示であり、同大学における国際文化学の核と言える思想であると評価できる。

また、同書では「国際文化学」という学問領域を大空に見立て、学問的営みを星座発見にたとえて説明しているが、これは星座が星と星をつなぐことで見えてくることを、文化学的営みにおいて立ち位置によって文化価値の意味合いが変わってくることにうまくなぞらえているものと思われる。「国際文化学」とは、定式化された枠組みに知識を落とし込む学問ではなく、見え方それ自体、つまり立ち位置それ自体を考えてゆく知的営為なのである。

換言すれば山口県立大版「国際文化学」教育とは、学問レベルと明確に結びついた「幸福な社会生活を手に入れるための文化コーディネート力」教育であるといえる。それは国際的な文化の羅列による知識偏重型教育でもなければ、プレゼンテーション力や語学力教育に偏重した単なる技術教育でもない。「つなぐ力」としての知性と「寛容性」「積極性」などの精神態度の育成を併せ持った、これからの時代にふさわしい実践的教育なのである。

ただし執筆意図が高尚であるがゆえに、高卒直後の一年生から読み始めるテキストとしては、やや内容が抽象的すぎるかもしれない。この点については、もう一方の『知の空を羽ばたこう』を併用することで、「山口県立大で学ぶこと」を学生がしっかりイメージーションするよう促すこ

とで補っているのではないだろうか。2冊を併用することで、キャンパスライフ・ガイド、スタディ・ガイド、国際文化学概論の3要素が上手く機能するように構成されているものと推察される。

（3）本学が学ぶうる点

①学問レベルとつながることで明確になる「教育の物語」

さて、このような山口県立大の2冊から我々は何を学ぶうるであろうか。まず目を引くのは「学び」の背後に「教」と「学」を結ぶ明確な背骨を作ること、知的考察方法、表現技術といった「アカデミックスキル教育」、「語学教育」や「教養教育」、さらには「専門教育」の意義がかなり明確になっている点である。

一方本学の「国際文化学科」の現状を見ると、少なくともカリキュラム上は山口県立大学以上に豊富なメニューであることが伺える。また、学びの体系化を目指し、現行カリキュラムからは必修授業も大幅に増加し、ナンバーリングも整備され始めた。しかし教学レベルを接合する背骨については、ほとんど整備されていない。従って「何のための教育か？」という肝心の部分が全く見えてこないのである。形の上では教育の体系化が図られてきたものの、内実としての「教育の物語」をどう共有するかについては不明のままである。

本学においては、「一つの専門分野を体系的に学修するとともに、多様な専門知識の吸収を促す横断的な学修ができる」とうたわれているが、肝心の「物語」が不在のまま、形式上の体系化のみが進んでしまったことで、今深刻な課題に直面しつつある。それは、本来物語の共有によって担われるはずの学びの体系性が、一方において個々の分野（教員）レベルでの任意性に任せられ、他方では形式によって拘束されることで、結果として「体系的学びの形骸化」を生んでしまっていることである。物語によって意義付けられないままカリキュラム上の「縛り」となっている必修科目の数々は、その典型であろう。

今後本学はカリキュラム上の縛り（とりわけ必修科目とナンバーリングのあり方）について見直しを余儀なくされることは間違いない。しかしそのさい大切なのは、単に「拘束を弱くする」ことではなく、教学レベルの接合点に、「国際文化学とは何か」という明確な物語を据えることである。

②「教育重視」とは何か？

本来教育は研究等のアカデミックな活動と「対置」「対立」するものではない。何故ならば、教育には目標を提供すべき理念が存在し、その理念と具体的目標、方法論の妥当性をめぐり、絶えずアカデミックな「問い直し」がされるからである。それは、とりわけ特定の指導要領に基づく「授業運営」を行わない大学においては、個々の教員自らが自由かつ責任のある裁量に基づいて執り行われる。そしてさらに言うなら教員による執務のベクトルは、教学レベルに横たわる「教育の物語」の共有によって方向づけられる。

しかし、大学の役割として、社会人としての総合的な「人間力」の育成が求められる今日、ともすると両者は対立関係に付置され、「研究」はあたかも「教育」にとっての阻害要因であるかのような扱いを受けることすらある。これは本質的に間違いであると評者は考える。

とりわけ本学のように、学際的知識を学生自身が再コーディネートすることで教育が貫徹する学部においては、情報の付置、あるいは接続に関するアカデミックな編集センスを磨くこと自体が、きわめて有効な「人間力教育」につながる。このことは「モラトリアム期間」の有効性が失われつつある今日においてもなお、いや、ポストモラトリアムの時代だからこそ有効な論理であると言っていい。そして、学生に対してそのようなイマジネーション力を促していくものは、他ならぬ我々の専門家としての研究力を起点とした、「国際文化学」という物語のもとでの緩やかな教員連携なのである。

無論本学の人間教育も基本的にはこのような視座に立って展開されていると考えられる。従来ともすると「個人商店の寄せ集め」感もあった本学も、山口県立大の姿勢を学びながら「研究」と「教育」の相互連携を考えてゆくべきであろう。

(評者：梅津顕一郎)

III 国際文化学の入門テキストを編むということ

まとめにかえて、ここでは国際文化学の入門テキストを編さんすることの意味を、「対話」をキーワードに考えてみたい。

本書評で取り上げた一冊『国際文化学の第一歩』の「おわりに」は、以下の興味深いエピソードが書かれている。「編集にあたり思い浮かんだのは、－(中略)－ヒックス『経済史の理論』の次の一節である。... 経済史の一つの大きな役割は、経済学者、政治学者、法律学者、社会学者および歴史家－一般史家、思想史家、技術史家－が一堂に会して互いに話し合える公開討論の場をつくりあげることである」[静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科,2013:436-437]。

ヒックスが公開討論の場を形成する役割を託した経済史を、国際文化学に置き換えることは可能だろうか。評者(倉)の私見では、少なくとも国際文化学の入門テキストを編さんするという営みそれ自体が、公開討論の場を形成する可能性を有しているということができる。

公開討論がやや大仰な表現ならば、それを「対話」と呼んでみてもいい。3大学の国際文化学の入門テキストを通読して痛感したのは、入門テキストの編さんを可能にする条件の一つは、間違いなく多様な水準での対話にあるということだ。さらに言えば、テキストを編さんしようとする営みそれ自体が、編さんの条件である多様な対話を促進していくということだ。それは同じテキストを執筆する教員間の対話ばかりではない。学生と教員の対話も同じくらい大切である。文教大学国際学部のテキストが掲げる二項対立的な認識の罫に陥らずグローバルゼーションを読み

国際文化学の入門テキストを読む（倉真一・四方由美・森部陽一郎・楠田剛士・梅津顕一郎）

解く知恵、あるいは正解を知識として安易に求めずに学ぶつづける姿勢の大切さ、これらを学生たちとともに議論を重ねながら、いかに伝えていくのか考えぬく…こうした編集スタイルそのものが学生たちとの日頃からの対話に依拠していることは明らかだろう。

学問分野や大学を越えた対話の重要性も明らかだろう。山口県立大学が学外の様々な研究分野の専門家による連続講演会を企画して「国際文化学」の創造に向けた対話の場としていったように、また平成23年度「日本国際文化学会」全国大会における「国際文化学教育テキスト」というフォーラムが、大学と大学、教員と学生との対話の場であったと同時に、各大学でのテキスト編さんに向けた活動を促し、その数年後に3大学の入門テキストが新たに出版されていったように。

評者らの「MMU型リベラルアーツ入門授業とテキストに関する自主研究」プロジェクトも、こうした対話あるいは対話的な姿勢を大切にしながら、様々なレベルでの公開討論の場を産み出す「種まき」のような役割を果たしていければと考える。

参考文献

- 奥田孝晴・藤巻光浩・山脇千賀子 2008『[新版] グローバリゼーション・スタディーズ：国際学の視座』新評論.
- 奥野孝晴（編著）2012『[三訂版] グローバリゼーション・スタディーズ：国際学の視座』創成社.
- 奥野孝晴・椎野信雄（編）2015『私たちの国際学の学び：大切なのは「正しい答え」ではない』新評論.
- 静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科（編）2013『国際文化学への第一歩』すずさわ書店.
- ヒックス, J.R. 1995『経済史の理論』講談社（講談社学術文庫）. (= John R. Hicks 1969 *A Theory of Economic History*, Oxford University Press.)
- 平野健一郎 2000『国際文化論』東京大学出版会.
- 三宅義子・片山弘基・安野早己・山口県立大学国際文化学部（編）2002『国際文化学の創造』明石書店.
- 山口県立大学国際文化学部（編）2013『星座としての国際文化学：みつけて、つなぐ、学びのスタイル』青山社.
- 山口県立大学国際文化学部（編）2014『知の空へはばたこう：国際文化学をまなぶあなたへ』東洋図書出版（西部本社）.

